

---

# 魔王の家の村娘 A

ごぼふ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王の家の村娘A

### 【Nコード】

N6193Z

### 【作者名】

じぼふ

### 【あらすじ】

現代日本に住む自称魔王の兄と、その妹の元に召喚されたのは、剣も魔法も使えないごく普通の村娘と小さなドラゴンだった。

逆召喚モノのラブコメファンタジー。

自HPで掲載したものを、加筆修正したものです。

## V S 穴

それはクマル暦六百九十三年、八番目の月の事であった。

世界の端で第二十九番目の魔王が世界征服を開始し、人類と魔物の戦いが始まるうとしているそんな情勢の中。

その反対側の小さな村、アテューンのはずれの森。

アン＝ノンマルトンは月明かりの下、頭を垂れトボトボと歩いていた。

彼女がそうして歩くたび、稲穂のようなお下げもゆらゆらと揺れる。

それに合わせ、蛍のような緑色の燐光が大気の中をふわふわと踊った。

魔力の粒、ラーナの光だ。見たくなくとも入ってくるその光を、未だに涙溢れる瞳に映したアンの心もまた、ふわふわゆらゆらと定まらずに揺れていた。

同じ思考をぐるぐると繰り返す頭の重さに引かれるように、足が前に進む。

彼女が、彼女の足が向かっているのは、アンが住んでいる村の麓にある小さな湖だった。

ラーナの混成率が高い、その清らかな水に足を浸すと、自らの悩みや悲しみがスウッと引くような気がしてくるのだ。

「ぐず……」

鼻をすすり、瞳に溜まった涙を服の袖に押し付けると、アンは再び前を向いた。

そして、そこで彼女は前方に黒い塊が落ちている事に気づいた。

ラーナの光で輪郭がぼんやりと映し出されているが、彼女の膝下ほどの大きさの、ハリネズミのようにツンツンと逆立ったシルエットを持つそれが何なのか、アンには察しがない。

鈍った頭で、彼女は一步、二歩とそれに近づいた。

すると、突如それがギョロリと目を開けた。

そう、それは生き物だったのだ。

それがトカゲか口ばしの無い鳥のような口と、皮膜の張った翼を広げた所で、彼女はその正体によく気づいた。

ドラゴン……存在を確認されている魔物の中でも最強と名高い存在だ。

これは子竜のようだが、それでも熟練の騎士数十人を屠る力があると、アンは聞いた事がある。

その証拠とでも言うように、こんなに小さな体なのに、その金色の瞳に映されただけで体が竦む。

「ヒッ」

彼女が短い悲鳴を上げ一歩下がると、竜はそれを合図にアンへと飛び掛ってきた。

嫌だ、何故自分がこんな目に。理不尽だ。生まれた時からずっと。自分の人生は理不尽な事ばかりだ。誰か、誰か助けて。

アンは呪い、恨んだ。そして願った。

その瞬間、彼女の足元から、漂うラーナとは別の、強いオレンジの光が発せられる。

足元の感覚が消えうせ、彼女は引かれるまま地面に開いた穴へ、落ちた。

## V S 異世界

「きゃっ」

「ぶふごぉ！」

着地はすぐだった。

体が落下した感覚がしたかと思えば、すぐに何者かの呻きが聞こえ、下に落ちていたはずの体が、今度は前方へと落ちた。

「え？ え？」

自分の身に何が起こったか、彼女にはまるで理解ができない。四つんばいのまま顔を上げると、そこには落ちる直前に見た、オレンジ色の光を発する穴があった。

穴。確かにそれは穴だった。彼女は初め、それを絵画に穿たれた穴だと認識した。

しかし、よく見れば違う。彼女が絵画かと思ったその背景は現実のものであり、穴は何も無い中空を当たり前のように穿っていた。

「魔法……？」

きつとそうだ。目にした事はないが、彼女のような普通の村娘が理解できない現象は、大抵魔法なのだ。

そうか。自分は誰かの魔法で、咄嗟にあのドラゴンから助けられたのだ。

彼女の中で辻褄が合い、アンは左右を見回した。

この部屋に自分を助けてくれた魔法使いがいるはずだ。

そうして、ある程度落ち着いた頭で周囲を見回してみると、そこはとても奇妙な空間だった。

草を細かく編んだかのような床。正面は木枠に薄い紙を貼り付けたような壁。

部屋の反対側には、派手な模様の毛布の上に板が乗っている。

テーブルクロス？ いやそれならば天板は布の下にあるべきだし、あんな厚手の毛布を使う必要は無い。それに随分と背が低い。

彼女に理解できるのは、床に白い線で書かれた魔法陣と、その丸い外周に置かれた蝋燭だけだ。

その上に、件のオレンジ色の穴が浮かんでいる。  
やはりこれは魔法の儀式の痕跡のようだ。

しかし肝心の魔法使いが…… 思いついて、彼女は後ろを振り返った。

「ひゃっ」

すると、そこには黒いマントを羽織った少女がいた。

十を超えるか超えないかの歳頃であり、振り返ったアンに対し、両手を掲げた姿勢でぽかんと口を開けている。

とても高位の魔法使いとは思えない。しかしクマル国の十三代皇帝は、このぐらいの年でいかなる魔法も修めていたと聞いた事がある。

そうだ、魔法使いに年齢など関係ないのだ。

そう合点したアンは立ち上がり、振り向いてその幼い魔法使いに礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ 貴方が魔法で私を助けてくれたんですね！？」

「ふぎゃ！」

するとどこからか、踏み付けられにじられた猫のような叫び声が聞こえた。

「…… 使い魔？」

「違うわぁ！」

叫び声と共に、地面が盛り上がる。

アンが尻餅をつくと共に、地面、もとい彼女に踏みつけにされていた人物が立ち上がった。

「ヒップアタックから上四方固め後即スタンプとはどういう見だこの異世界人！」

アンに指をつきつけ叫ぶ相手は、彼女と同年代の男だった。

奥にいる少女と同じように黒マントを身につけており、どここな

く顔も彼女に似ている。

「ど、どなたですか？」

「どなたですかだ！？　まずお前から名乗れ！」

狼狽したアンが尋ねると、男は激昂した様子ながらもつともな事を言った。

「え、あ、わ、私はアン＝ノンマルトンです」

「普通な名前だな！　異世界人のくせに！」

勢いに押された形でアンが名乗ると、初対面のはずの男が失礼な事を吐き捨てる。

その言葉が、彼女の心に火をつけた。興奮しながら、思わず言い返す。

「ふふふ普通ってなんですか！？　じゃあ貴方はどんな名前だっというんですか！？」

「平平良良」

「ヘイヘイヨイヨイ？」

「違うわ！　それでヒラタイラ良って読むんだよ！　漢字も読めないのかよ最近の異世界人は……」

また何か叫びかけて、男の言葉がぴたりと止まる。

コホンと咳払いをし。

「それでヒラタイラリヨウと読むのだ。教養のない異世界人め」と罵倒しなおした。罵倒には変わらない。

そんな事を言われても、男は確かに先程ヘイヘイと自分で楽しそうに名乗ったのだ。

それを別の読み方で読めとはどういうことだ。

アンは眉間に皺を寄せた。

男も何か違和感を覚えたようで、首を捻っている。

すると男の後ろにいた小さい方の少女が男の方を叩いた。

「なんか異世界移動ゲートをくぐると現地の言葉が分かるようになるけど、たまに誤翻訳するって書いてあるよお兄ちゃん」

手に持った分厚い本を指差し、男に何事か説明している。。

「えーっと」

「あ、私は平平良舞。この男の人の妹」

「はあ、初めまして。平たいラブさん」

「……うん、翻訳に関してはかなりダメみたいだね。私の事はマイって呼んでね。えーと、アンさん」

相変わらず事態が飲み込めずに曖昧な返事をするアンに、少女がため息をつく。

「くそ、ポンコツ魔道書め。通りで安いはずだ」

男、ヒラタイリヨウが魔道書とやらを、妹、舞から奪い取り床に叩きつける。

「でも異世界から召喚は出来たんだから成功なんじゃない？」

それを舞がなだめた。

先程から彼らが頻繁に出している単語、それがずっとアンには気になっていた。

彼女はついに勇気を出し、彼らに質問をした。

「あ、あの、異世界ってなんですか？」

「だから読んで字の如く、異なる世界という意味だ。そのぐらいは流石に翻訳されているだろう？」

良がバカにしたように肩をすくめた。この、異世界？ においても、そういう仕草は共通らしい。

「要するに、お姉ちゃんの居た場所の常識とか法則とかがまるで通用しない遠い場所ってことね。ちなみにここは地球の日本って国だよ」

それをフォローするかのうちに、舞が補足する。

よくは分からないが、とにかく自分は一瞬にして、遠い場所へと連れて来られてしまったらしい。

それだけを認識すると、アンは叫んだ。

「そ、その、困ります！」

「困る？」

「だ、だって、明日も朝食の準備をしなきゃいけないし、買い物も

あるし、家族だって心配……」

そう言い募り、アンは途中で言葉を詰まらせてしまう。

頭の中に、今夜の出来事がフラッシュバックした。

「……心配するな。俺は別にお前のような一般異世界市民を呼び出すためにこんな儀式をしたわけではない」

そんな彼女をどう思ったのか。良は後ろ頭を掻きながらそう告げる。

もしかして彼は、自分を慰めているつもりなのだろうか。アンの意識が、追憶からそんな思考に引き戻される。

それから、彼はニヤリと笑って黄昏色の穴へと近づいた。

「俺様が華々しくデビューする為にこのゲートを開いたのだ」

「ダ、ダメです！」

そこで、彼に例を言うべきか迷っていたアンはようやく我に返った。

良はそこをくぐろうとしているが、その先には……。

「ダメ？」

彼女の言葉に振り向いた良の脇の下辺りから、黒いモノがにゅつと顔を出した。

それは先程アンが襲われた生き物。小さなドラゴンの頭であった。

「ドラゴンが……出たー！」

「うおおおおー！」

それに気づいた良は、咄嗟の行動だろうがドラゴンの頭を脇の下に抱え込む。

ドラゴンが嫌がり首を振ると、それだけで彼の体が浮き上がった。

「お、お兄ちゃん！」

「な、な、な、なんだこいつうー！？」

良が両手で竜の首に掴まり、上下に跳ねながら叫ぶ。

「だからドラゴンですよドラゴン！」

「ドラゴン、って、あの、火とか、吐く、奴、か！」

「そうですよ、火とか、ひiiiiiiii！」

アンの言葉が終わるより早く、ドラゴンは口を開きそこから何か飛ばした。

それは舞のマントをかすめ、さらに床をも貫通する。刺激臭が鼻を突いた。

「酸か!？」

良が叫んだその通り、それは高濃度の酸だった。しかしそのあまりの速度に、アンには空間が削れたようにしか見えない。

「ぬおおお!？」

アンが壁に気を取られている間に、良の更なる叫びが響く。

そちらを見ると、ゲートを飛び出した子竜の体が宙を浮いていた。正面へとスウッと飛び出したかと思えば、重力に引かれて落ちる。自分もあんな風に出てきたのかしら。現実から逃避しかけたアンの頭がそんな事をぼんやりと考える。

「のおおおおお!」

落下した子竜が、ふるふると頭を振る。その度に良が左右へと振り回された。

やがて、子竜の瞳がはつきりとこちらを捉える。

「逃げる!」

良が叫ぶが、アンも舞もすぐんで動けない。

子竜が再び口を開けた。

「くそ、こうなったら!」

良が子竜の首に回していた手を片方放し、頭上に掲げる。

それが背後にあるオレンジの光に照らされ、一瞬輝いて見えた。

そして、振り下ろされる男の手。

それが子竜を――。

「おー、よーしよしよし」

撫で始めた。それも凄い勢いで。

「そんなこふお!」

している場合かと、叫びかけたアンの口を後ろから舞が塞いだ。

「お、お兄ちゃんに任せて」

そんな悠長な。自分が口を塞がれている今にも、子竜は口から酸を吐こうとしているのだ。

舞の突飛な行動に驚き、いつの間にか体も動くようになっていいる。アンが慌てて逃げようとすると。

「キユオオオオ！」

子竜が叫んだ。顎を上げ、背筋をぴんと伸ばす。

更に良がその背中を撫でていくと、今度はくたりと力を抜き、彼に体を預けはじめたではないか。

その顔はドラゴンなど初めて見たアンでも分かるほど弛緩しきり、良が首を掻いてやると、子竜のほうからそこを擦り付けている。

「相変わらず、お兄ちゃんの手はすこい……」

「ぶはっ、な、なでなで？」

舞が自分の口を開放したのでアンが聞き返すと、少女はうんと真剣な顔で頷いた。

「そう、お兄ちゃんの手は特別な」

「と、特別って……？」

「あれを受けたが最後。どんな生き物も抗えなくなってしまうの。誰彼構わず飛び掛って皆に恐れられていた三丁目の猛犬ペロだってお兄ちゃんになでられた途端骨抜きになって、今では飼い主に撫でられても『ご主人様は好きだけど、でも私あの男の指が忘れられないの……』みたいな顔をするようになってしまった……」

「あ、あれは、魔法なんですか？」

しみじみと語る舞を遮り、アンは彼女に問うた。

ドラゴンと言えば最強の魔物であり、いくら獰猛だろうと犬と比べるべくもない。

人間に屈するなど有り得ない生き物のはずだ。

それが、今は気持ち良さそうに目を閉じ、口の端から酸の涎をジュウジュウとこぼしている。

「うっん、私達は魔法なんて使えないよ」

「で、でも……私を呼び出したじゃないですか」

「あれもいっぱい準備して、色々用意して、魔道書の通りにやって偶然できただけだから」

「そ、そうなんですか」

それでも魔法は魔法じゃないの？ とアンは思うのだが、この場所とアンのいた所では常識が違うのだと言われたこともあって、深くつつこむ事が出来ない。

「ようし、良い子だ。流石異世界最強生物。良い毛並みではないかほれ、首をあげろ」

良が言うように、よく見ればそのドラゴンは短い毛が体を覆っており、皮膚は目と同じく金色をしていた。

良が指示すると、子竜は言われた通り首を上げた。彼が両側から首の付け根辺りを揉んでやると、首を伸ばしプルプルと震える。

ドラゴンは賢い種族で人語も解すると聞いたことがあるが、それに従うなどと言う話は聞いたことがない。

完全に、ドラゴンを手なずけている。

そんな事が出来る人間など、アンは知らない。

いや、人間以外なら、ただ一人だけそんな事をできる存在に、彼女は思い当たった。

「……魔王」

世界で唯一人……いや、正確には人間ではないが。そして倒されても倒されても現れるので単体でもないが、ドラゴンが従う存在と言えは魔物の長、魔王しかあり得ない。

いやしかし、彼が魔王？ まさか、自分を助けてくれた人がそんな事……。

「さあて、俺様の技術が異世界に通じる事は分かったし、早速征服しにいくかー」

「魔王……！！」

しかし葛藤するアンの思いは、あっさりと裏切られた。

「わっはっは、その通り！ 俺は貴様らの世界を支配する魔王だ！」  
指を突きつけるアンに対し、良は胸を張り高らかに宣言する。

どうしよう、自分は本当にこれから世界征服をしに行く魔王に出会ってしまったのだ。

「ようし、とにかく異世界へワープだ！ お前も戻してやるから感謝しろ！」

勝手な事を言いながら、魔王は子竜の背中をポンポンと叩いた。子竜が名残惜しそうに立ち上がり、彼を見上げる。尻尾など左右に揺れていたりする。

その様子に満足げに笑い、男がくるとゲートに向き合った。

何とか彼の侵攻を阻止しなければ。今は既に別の魔王が世界侵略を始めているのだ。

それなのに更に魔王が増えてしまったては、本当に人類は支配されかねない。

何とかしなければ、アンの頭がそんな思いで埋め尽くされる。そして気づくと彼女は。

「えーい！」

子竜の尻尾を掴み、その体を魔王（仮）の頭に叩きつけていた。

「クケー！」

「ギャー！」

「お、お兄ちゃー！ーん！！」

三重の悲鳴が響き、魔王がバレリーナのように回転しながら異世界への穴をかすめ、周りに立ててあった蠟燭につっこむ。

蠟燭が盛大に音を立て倒れ、魔王のマントに引火し、彼は痛みの為か火を消す為かゴロゴロと転がる。

そのおかげで火は燃え広がらず、床を転々と焦がすだけで消火された。

「はぁ、はぁ、はぁ」

子竜の尻尾を掴んだまま、荒い息を吐くアン。

パチンという音がし、部屋の中が眩しい光で照らされた。

「いきなり何すんだよー！」

鎮火を確認した良が、寝転んだまま抗議の声を上げる。

それから、「何をするのだ」と何の拘りか言い直した。

一時の衝動から覚め、アンが口を開きかけた時。

パキン。

甲高い音が例の穴から響いた。

全員がそちらに視線を向けると、穴であつたはずの場所に氷のような膜が張り、パキンパキンと、そこに次々とひびが入っていく。

「ああー！！」

とどめは後ろの少女、魔王の妹、舞の叫びであつた。

それに呼応するように、一斉にひびが広がり、ついにはバキーン！ と一際高い音を立て、欠片を撒き散らしながら砕け散つた。

「うひゃあああ！」

降り注ぐそれを避けようと、奇声を上げながら転げまわる魔王――良だが、砕け散つた欠片は地面につく前にスウッと消滅した。

「ああー！！！！ 異世界ゲートがー！！」

そして良の頭上には、もはやあのオレンジ色のゲートとやらはない。

明かりのついた、酸と焦げた匂いが充満する部屋に魔法陣だけが残されている。

「ななななんてことをしゃがる！　しゃがりますのだ！　するのだ！」

良が立ち上がり、何度も同じ言葉を言い直しながらアンに詰め寄る。

「だ、だって貴方が私達の世界を滅ぼすっていうから」

「滅ぼすのではない支配だ！　というかどうしてくれるのだ！　材料を集めなおすにはまた時間と費用が……」

「し、知らないですよそんな事！」

まくし立てる良の剣幕に耐え切れず、アンは手に持ったもので己の身を庇う。

そして彼女が手に持っていたものとは。

「シギャー！！！！！！！！」

こんな事は生まれて初めてだったのか。鈍器扱いをされた後、今まで放心していた子竜であった。

子竜は大声を上げ口から酸を発射した。首を捻り、それを間一髪で良が避ける。

「うおおお、せっかく懐柔したのにこのバカ者が！ お前ちよつと抑えてろ！ バカ、こつちに口向くんじゃねえよ！」

「え、え、え、でも今すごい暴れてて！ 何とかしてください！」

「誰のせいになったと思ってる！？」

「お、お兄ちゃん、これ以上家を壊したらママが……！」

「言ってる場合かー！」

こうして、西暦二千十年。

アン＝ノンマルトンは異世界の魔王の元へと召喚された。

## VS文明

「で、どうしてくれるのだ」

穴が開き、床が焦げ散々になった和室……という場所から、アンは男、平平良良に連れられ階段を降り、革張りのソファのあるリビングらしき場所へと案内された。

テーブルを挟んで向かい側に座った良が、開口一番に言ったのがこのセリフである。

「そ、その、殴った事はごめんなさいですけど、やっぱり支配とか征服とかは良くないと思います」

「一般人らしい画一的な意見だな。そもそも世界というのは既に誰かしらに支配されているのだ。だったらちよつとぐらい俺が支配してもかまわんだろう」

「一般人に殴られて転げまわる人の支配はちよつと……」

「殴った奴が言うな！」

良が叫ぶと、その膝の上に乗っていた子竜がびくりと首を起こす。先程の二の舞を恐れてか。彼は子竜の背中を慌てて撫でる。

「はい、お兄ちゃんといつと、アンさんにも麦茶とお菓子どうぞ」

そこへ彼の妹、舞が盆の上に飲み物と紙に包まれた物を乗せてやってきた。

彼女は兄の隣に座ると、包み紙をはずして中の物を口に入れる。

アンもそれを真似してみると、口に入れた途端甘い味が広がった。

「おまんじゅうで大丈夫だった？」

「ふあ、はふい」

舞に問われ、アンはコクコクと頷く。なるほどこれはおまんじゅうと言うのか、美味しい、が、彼女の口では、一口で食べるには大きすぎる。

もしかして異世界の人は自分より口が大きいのかしらん。などと

考えながらアンはそれを何とか嚥下する。

「……妹の真似をして一口で食う必要は無いぞ。というか麦茶飲め」  
「あ、ありがとうございます」

見かねたという様子の良が、恐らくガラスで作られている容器に入った褐色の飲み物をアンに差し出す。

それを受け取って飲み干すと、胸のつかえも取れた。味も悪くない。

「クーラーつけるね」

言って、舞が手に持った何かを操作すると、ピツと音が鳴りどこからか涼しい風が舞い降りてきた。

なんだろうこれ。アンがキョロキョロと周りを見回していると、良がコホンと咳払いをした。

慌てて視線を戻すと、彼はじつとこちらを見ている。

どうやら先程の質問の答えをずっと待っていたらしい。

「えーと、それで私どうすればいいんでしょう？」

「俺に聞くな！」

落ち着いた所で尋ねると、良に再び怒鳴り返された。

怒鳴りながらも子竜を撫でているのだから、器用なものだ。

「で、でも私、この世界の勝手という物を知らないの……。こっつてどんな世界なんですか？」

その質問に、向かいに座った兄妹は顔を見合わせる。

私何か変な事を聞いたかしら。などと彼女が困っていると。

「えーと、とりあえずこういうドラゴンとかはいないね」

「あと魔法もないな」

「エルフとかドワーフとかもないね」

交互にあれが無いこれが無いと挙げていく二人。

「勇者も魔王もない」

「魔王はいるじゃないですか」

良の言葉にアンがツツコミを入れると、彼は眉間に皺を寄せ、難しい顔をした。

「俺は……まだ正式には魔王ではないというか、まあいずれそうな  
る人材だが……」

「魔王見習いという訳ですか」

「一気に威厳がなくなるから、その呼び方はやめろ」

言葉を濁す良に助け舟を出すつもりでアンが尋ねると、彼の顔は  
更に渋いものとなった。

呼び方はともかく、認識としてはそんなところで良いのだろう。

アンはそうあたりをつける。

「とりあえず、良さんってこの世界を支配してるわけじゃないんで  
すね」

「こんなつまらん世界、支配する価値もない」

この世界が自分に殴り飛ばされるような人間が支配する世界では  
なくて良かった。アンがほっと息を吐くと、良はつまらなそうにそ  
っぽを向いて吐き捨てた。

「そういえば、先程から無い無いって言ってましたね」

「ああ、何も無い空虚な世界だ」

ついには子供のように口を尖らせる良。彼はこの世界が嫌いな  
かしら。そう考えると、アンの胸に言いようのない感情が芽生えた。  
世界を、嫌う。今まで一つの世界、その端の小さな集落しか知ら  
なかった彼女には、無かった感覚だ。

「おまんじゅうはあるじゃないですか」

「おまんじゅうがあってもなあ……」

アンがその解析不能な気持ちに戸惑いながらフォローすると、良  
は難しい顔をしたままではあったが、とりあえずこちらを向く。

「それに、この部屋にだって私が知らないものが沢山ありますし。

……あ、そうだ。私この世界のことが知りたいです！」

「俺が聞いたのは、どうしたいかではなくどうするかだ！」

「ああ、そういえばそんなお話でしたね」

すっかり忘れていたアンがあっけらかんと返すと、良はがっくり  
と肩を落とした。

しかしどうするのかと言われても、そもそもの話として、とアンは考える。

「えーと、良さんは私をどうしたいんですか？」

普通はこういう場合、選択権を持つのは相手側だろう。ここは彼の世界であり、アンは加害者であり、しかも良は魔王のタマゴなのだ。

魔王相手に加害者になった自分に、アンは今更ながら呆れてしまふ。

「え、俺？」

だが肝心の魔王とはいえば、何やらとても間の抜けた反応を示す。「そうです。こう、私をどうしたいとか。どうしてやりたいとか」言いながら、アンが身を乗り出し机に手をつく、魔王良は慌てて身を引いた。

「ば、バツカ！ 若い女の子が何言ってるんだよ！」

「え？ 私何か変な事言いました？」

「ごめんねアンさん。お兄ちゃんって人の十倍純情なの」

「は、はあ」

異界ならではのやり取りだろうか。アンにはもはや恒例となった生返事しか出来ない。

「バカ言つな！ 魔王たるもの一辺たりとも汚れていない心を持つものか！ えーと、お前にさせたいことだな！ させたいこと……」それに対して何の対抗心を燃やしてか。良は高らかに宣言すると、こめかみに手を当て考え始めた。

もぐもぐと新しい饅頭を摘みつつ、彼の答えを待つアン。

それから、アンが更にもう一個食べようか迷っている間に、良はアンに指をびつと向けた。

「そーだ召使いだ！ お前は俺の召使いになるのだ！」

「お兄ちゃん、考えた割に発想が小学生並み」

隣の舞が、半眼で彼に呟く。

「召使いって、具体的には何をすればいいんでしょう」

「この家を全部掃除させるし、俺達の料理も毎食作ってもらう!」

「それでだけ良いんですか?」

「え、ああああ……あー、えーと、あとゲームのレベル上げもやる」

「お兄ちゃん……」

アンにはそれがどんな行為かは分らないが、良の妹が彼を哀れみの目で見ている以上、大した事ではあるまい。

「私、魔王さんのする事だから儀式の生贄にされちゃうとかそういう事を考えてました」

「……それを想定していて、よく俺に判断を委ねられるな」

「えへへ」

「褒められてないからね、アンさん」

「こいつ、思いの外バカだぞ」

照れ笑いを浮かべるアンに、兄妹が揃って渋い顔になる。

子竜までが短く鼻息を鳴らした。

召使い……。アンはその言葉を反芻すると共に天井を見上げた。

そこには、先程ドラゴンが酸であけた穴が開いている。

「そういえば、この家にはお二人で住んでいるんですか?」

彼女の世界の基準では、良ぐらいの年になると自立する者も珍しくは無い。だが、このような一軒家を持つものは稀である。一山当てた冒険者ぐらいのものだろう。

「……今はそうだな」

渋面のまま、良がそう答えた。

「やっぱりお父様も魔王で?」

質問を重ねると、その渋面が濃くなり、汁でも出そうな表情になる。

「極悪な人間ではあるな。自分の下半身さえ支配できないが」

「へえ……」

やはり意味はよくわからない。舞が言っていた翻訳ミスとやらの所為かもしれないが、良の横を見ると彼女も浮かない顔をしている

ので、アンはそれ以上の追求をやめた。

「そんなことより」

良がため息を吐くと、あからさまに話を変えようとする。

「なんでしよう？」

やはりあまり触れないほうが良い話題のようだ。そう考え、アンは彼の話に乗ることにした。

「お前、シャワーを浴びて来い」

「え！？」

「ええ！？」

良の言葉に、女性二人が揃って声を上げる。

「お兄ちゃん！ 召使いなんていつて目的はやっぱり……」

「ば、違っ！ そんな意味じゃねえ！」

兄妹が目の前で騒ぎ出す。子竜がうるさそうにそっぽを向いた。

「その、目が腫れてるから……」

「ああ……」

「あ、あれ！？」

良がボソリと漏らすと、舞がアンの顔を見、頷く。

その言葉に、アンは慌てて目元を拭った。

どうしよう、きつとここに来る前ずっと泣いていた所為だ。

そんな顔でさっきまでずっと話していただなんて。恥ずかしくなり、ぐしぐしとこするが、それで直るはずもない。

「べ、別にそんなに目立つ訳じゃない。それにさっきも散々暴れたからな。……風呂の使い方は分かるか？」

「え、シャワーって、お風呂なんですか？」

「お前らの世界にはシャワーも無いのか」

「え、あ、はい。お風呂も普通はお金持ちの家か公衆浴場しかありません」

「……お前はしばらく独りにできそうにないな」

シャワーを知らないなら、さっき驚いていたのは何なのだ。愚痴ってから、良は妹の頭をぽんと叩いた。

「舞、入れてやれ」

「……はい」

妙な間があつて、舞が返事と共に立ち上がる。

何だろつと気になりはしたが、それよりもアンには意外な事があった。

「親切なんですね、良さんって」

初対面の時はずっと怒っている怖い魔王だと思っていたが、あんな事をした彼女をひどい目にあわせる気もないようだし、涙の痕に気づいてお風呂まで勧めてくれる。

この人は本当は、良い人なんじゃないかしら。などと考え、アンが彼に礼を言つと。

「お、俺は、親切なんかじゃない!」

——急に、良が立ち上がり叫んだ。子竜が慌ててテーブルの上に着地する。

先程から怒つてばかりの良だったが、何か様子が違う。拳を握った彼の表情は、怒りと言うより後悔、もしくは自己嫌悪のようなものに溢れている。

何か悪い事を言つたかしら。彼の豹変具合にアンは困惑した。

良の方も言つてからハツとした様子で。

「その、召使いが汚れていると、俺の教育が問われるだろう」と付け足した。

こちら側に回つてきた舞が、良の様子を痛ましそうに見てから、アンに微笑む。

「お兄ちゃんは仮免気味にも魔王なんだから、親切なんて言っちゃダメだよ。こう言つてあげなきゃ」

そうして、彼女はアンにごによごによと耳打ちをした。

その内容を聞き、よくは分からないまま頷き、アンはその言葉を口にする。

「安いツンデレですね、良さんって」

「誰が安いツンデレか——!!」

また怒られた。しかしその怒声に、先程のような内側に向けられたものは無い。

「ええい、良いから早く風呂に入ってこんか！」

それを確認したアンは、手を引く舞に連れられ、風呂場へと向かった。

その胸には、妙な安堵があつた。

## VSサービスシーン

脱衣所だと告げられた場所で、アンはおずおずと服を脱いでいく。ずつと風呂と言えば公衆浴場であつた彼女なので、同性に裸を見られる事など慣れたものだと思つていた。

だが、まったく知らない人間でもない、かと言ってそれほど親しいとも言えない人間と個室に入るとなると、やはり緊張した。

そう、この世界の風呂は個室なのだ。体を洗う場所と浴槽。それぞれが人間二人分ほどのスペースしかない。

「アンさん？」

一方で舞は体を隠す様子も無く、手に持ったホースから、ジョウ口のように細かく分かれた水を出している。

「え、いえ、その…… ちょっと待ってくださいね」

言つて、彼女は背中を向け、自らのスリップの胸元に指をかけ、その下の体に目をやる。

彼女が躊躇する理由は、もう一つあつた。

「大丈夫だつて、私よりは大きいから」

「舞さんつて、おいくつなんですか？」

「六十六」

「え、舞さんつてもしかしてお婆ちゃんなんですか!？」

思わず振り返り、この世界の人間は老けないのか。敬語を使つていて良かった。などとアンがビックリしたり安心したりしていると、舞が違う違つと手を振つた。

「ああ、年ね。年はねー、十一歳だよ」

それから、彼女はそう答え直す。

この世界と、自分のいた世界で年の数え方つて一緒なのかしら。一瞬疑問に思つたアンだが、舞を見る限り十一歳と言われて違和感が無い。

魔法の翻訳のおかげなのかもしれない。結論は出そうにないので

アンは疑問を脇に置いた。先にでた数字についてもだ。

「十一歳なら、これから大きくなるじゃないですか……」

「アンさんはいくつなの？」

「十六です」

「あ、じゃあお兄ちゃんと一緒にだね。それならこれからもっと大きくなるよ」

「でも、私はその……」

「ほら、早く入ろ。風邪引いちゃうよ」

「は、はい」

言いかけたアンだが、舞に急かされ、躊躇いながらもついにスリッパとドロワーズを脱ぎ捨てた。

結んでいた髪を解き、そろそろと風呂場に入る。

「すべるから気をつけてねー」

「ど、どうも」

「で、これに座って」

「わかりました」

「お客さん、こういうお店は初めて？」

「はい？」

「ごめん、何でもないの。お兄ちゃんにやったら下品だって怒られたし」

勧められるままに不思議な材質の椅子に座ると、舞が不可解なことを言い出した。

アンが聞き返すと、通じなかったのが不満らしく舞は口を尖らせる。

この世界の定型句か何かだろうか。彼女にはやはりよく分からない。

「お兄さんともこうやって入るんですか？」

「うん、そうだよー。あ、シャワー当てるから冷たかったりしたら言ってね」

返事をしながら、舞がそのスコールのような水をアンの背中に当

ていく。

……温かい。お湯である。これがシャワーだったのか。

彼女達の話では、この世界には魔法が無いらしい。だが、これが魔法でないなら何なのだろう。そう、アンは考えた。

「どうしたの、アンさん」

返事をしないアンを訝しがって、舞が尋ねる。

「いえ、この世界って不思議だなーと思って」

「そうかなー？ そっちの世界のほうがずっと不思議だと思うけど」

「良さんもそう言ってましたね。だからこちらの世界に来ようと思っただけですか？」

「んー、私はそういう訳でもないんだけどねー。あ、目をつぶったほうがいいよ」

言われた通りにすると、髪にシャワーが当たる。

「アンさんって、髪キレイだよー。あ、全然引つかからないや」

言いながら、舞がアンの髪の梳いていく。

「あ、舞さん？」

「髪、洗ってあげるね。シャンプーが目にも染みるから開けちゃダメだよ」

舞はしばらくシャワーと共に指でアンの髪の汚れを落としていく。それから彼女はアンの髪にペタペタと何かを塗り、頭皮を指で揉むようにして広げていった。

アンは他人に髪を触れられる事に多少の抵抗がある性質なのだが、彼女に触られ、なおかつ謎の液体を塗られてもあまり不快ではない。「うっふっふ、私もマッサージは自信があるんだ。お兄ちゃんには全然かなわないけど」

しかし何故だろう。指自体は心地よいのだが、彼女の笑いからは不穏なものを感じる。

シャワーは温かいというのに、不思議な寒気がアンの背中をゆっくりと上っていった。

そんな彼女に構わず、舞は喋り続ける。

「私の髪、いつもお兄ちゃんに洗ってもらってるんだよ。お兄ちゃんの指はねー。すごい。気持ち良くて、いっつもぼうつとしてるうちに終わっちゃうんだ……。でも、私の髪には終わった後もぼんやりと感触が残ってて、それが時間が経つと引いていっっちゃうんだけど、アルデンテのパスタみたいに、髪一本一本の芯に熱さが燦っててね。クセになっちゃうの」

シャンプーとやはらは、どうやら泡のようだ。それのおかげで上手く喋ることができない。

それができたとして、彼女のトークに口を挟めたかは分からないが。

「会ったばかりのアンさんに言うのもどうかと思うんだけど。私ね、今迷ってるの。何に迷ってるのかっていうと、大人になるか子供のままでいるか。子供のままでいたほうがお兄ちゃんにはいっぱい撫でてもらえると思うんだけど、子供のままじゃお兄ちゃんはきつと離れて行っちゃうし、きつと大人になったらもつと気持ち良いことが待ってると思うんだよね」

彼女の話聞きながら、アンは何となく理解していた。

ドラゴン、あのプライドと知能の高い種族を一瞬で陥落させる指それを十一年間受け続ける事の意味を。

シャワーが再びかけられ、シャンプーが洗い流されていく。

前髪を顔に貼り付けたまま、アンは動くことが出来ない。

恐る恐る、ようやく目を開けると、鏡に映った舞がニッコリと笑っていた。

「はい。今の全部ジョーダンね」

「はい!？」

「ごめんね、異世界の人には分かりにくかったよねー」

「じよ、冗談……」

言いながら、今度はタオルに石鹸をこすり付け始める舞。

アンの頭は混乱したままで、彼女の言葉についていけない。

冗談だったのか。こちらの笑いのツボは本格的に自分達のもの

は違うらしい。

アンが自分でも成分のよく分からない深い息を吐いていると。

「お兄ちゃん。体のほうは洗ってくれなくなっちゃったんだよねー。だからアンさんで憂さ晴らしさせてね」

鏡に映った舞が、タオルを持っていないほうの指をワキワキと動かしていた。

「そ、それも冗談ですよね」

「うふふふふ？」

「イヤー……!!」

アンの悲鳴が風呂場に響く。

その日、その場所で、アンは魔王より恐ろしい人物を見たのだった。

## VS名前

「ただいま戻りましたー……」

アンがふらふらと居間に戻ると、雑誌を読んでいた良が子竜と同時に顔を上げた。

「物凄い悲鳴が聞こえたが、無事か？」

「き、聞こえていたなら助けてくださいよお」

「どうせシャンプーでも目に入っただろう？　そして俺が何事かと駆けつけると、キャーエッチーとか言っつて、その顔に桶でも投げつけるつもりだったに違いない。お前のような一般異世界人がやることなど分かりきっているのだ」

そして意味不明なことをつらつらと言う。多分これは冗談ではなく本気で言っているのだろう。もはやそれがどちらであろうが、今のアンにはどうでも良くなっていた。

「あー、良いお湯だったねー。アンお姉ちゃん」

そんな彼女の後ろから舞が現れ、アンに意味深な視線を送る。

「は、はい、舞様……舞ちゃん」

アンは彼女にギクシャクと言葉を返す。まさか年下の同性に、あんな辱めを受けるとは予想していなかった。

良は二人に不審そうな視線を向けてから、まあいいと咳払いをし。「で、その格好は何だ」

と、もつと不審そうな目で見た。

「何って、パジャマだよ」

それに対し、舞がさらりと答える。

「へそが出ているではないか」

良に指摘され、アンはまるで雷が落ちたかのように急いでへそを隠した。

「私のじゃサイズが合わないんだもん」

アンが着ている服は、パジャマというらしい。

この世界の標準的な寝具だと舞は言っており、ゆったりと作られている為アンでも着る事はできるのだが、如何せん手足や臍の丈が足りない。

舞がこれで良いのだというので従ったが、やはりこの着こなしは間違っているようだ。

「……風邪引くぞ。腹巻でも出してやれ」

「りようかい」

返事をし、舞は二階へと上がっていった。

「しんせ……ツンデレにどうも」

「だからその奇怪な日本語はやめろ」

親切、と言いかけてアンが言いなおすと、良は辟易とした顔で返した。

彼は手に持ったおまんじゅうを、膝の上にいる子竜にやっている。

「食べさせちゃって良いんですか？」

「……異世界最強生物が、まさか饅頭詰まらせて死ぬなんて事はあるまい」

それでも少しは不安に思ったのか、彼はそれを千切って与えはじめた。

何となくそれを微笑ましく思いながら、アンは彼の向かいに座る。

「というか、こいつの餌には何をやればいいんだ？」

彼女の表情が気に入らなかったのか。やはり良は憮然とした顔をしながら、アンに問いかける。

「んー、確か何でも食べますよ。牛とか、人間とか」

「人が手を差し出しているときに、不安になるようなことを言うな」

「だって、ドラゴンってそういう生き物なんですもん。普通の人は傍に居たいとすら思いませんよ」

それを平然と飼いならし、飼い犬扱いである。魔王といえど恐れは無いのか。アンもさすがに呆れて、彼にそう言った。

「その割には平気そうだな。一般異世界人代表」

「え？ ああ、何だかよく分からない事が続いた所為で、感覚が麻

痺してきちゃって」

良に指摘され、アンはようやく自らの矛盾に気づいた。

出会ったときは恐怖で震えが止まらなかったと言うのに、今はこのドラゴンに愛嬌のようなものまで感じ始めている。

先程、風呂場で死ぬより恐ろしい目にあったからだろうか。それとも。

「私の世界との繋がりがって、この子しかいないんですよ」

そうだ、今の自分はまったく知らない世界で、一人ぼっちなのだ。今更それを意識し、アンは胸の中をじんわりと締め付けられるような感覚を覚えた。

「そ、その、俺は謝らんぞ」

「あ、ごめんなさい。良さんを責めたい訳じゃないんです。あの穴を壊したのは私だし、そもそも助けてもらわなかったら、この子に食べられてましたから。それに……」

あからさまに動揺している良に、アンは慌てて弁明する。

更に出かかった言葉を、彼女は途中で飲み込んだ。

「どうした？」

「い、いえ……」

何となく、彼に対して『それ』を言うのは憚られる。彼女自身それをはつきり断言できる訳ではなかったし、それを言えばきっと、何故と問われるであろうから。

良が押し黙り、アンも口を開けない。気まずい沈黙が降りた。

「ただいまー。あれ、どうしたの？」

そんな空気の中、舞がピンク色の布を持って戻ってきた。

彼女は両者の顔を覗き込むが、良は首を横に振り、アンは曖昧に笑うだけなので、諦めた様子でアンの前に立った。

「アンさん、ばんざーい」

ばんざいという言葉が、アンには何故か両手を上げろという意味だと伝わる。

彼女は言われた通りに両手を上げ、それから舞がニヤリと笑って

いる事に気づき、戦慄した。

が、舞はその伸縮性のある布をアンの頭の上から通し、腹の辺りで止めると何もせずに体を離れた。

「期待しちゃった？」

「し、してません！」

ニヤニヤと笑ったまま良の隣に座る舞に、アンは顔を赤くして言い返した。

ワザと先程の風呂の件を連想させたらしい。

良はもちろん訳の分からないといった表情をしている。

恥ずかしくなり、アンはもじもじとその腹巻とやらを弄った。

どうやら編み物のようで、彼女の腹にぴったりとくっついている。なるほど、確かにこれならお腹を壊さなくて済みそうだ。

この伸び縮みはお婆ちゃんが編んでくれたマフラーと同じ原理かしら。

そう考えた後、祖母の顔を思い出してまた気分が沈みそうになり、アンはプルプルと首を振った。

「さっきから何だ」

不審極まる、といった表情でこちらを見てくる良。

アンは彼に愛想笑いを浮かべながら、何か誤魔化す材料はないかと周囲を見回した。

それから、ふと視線が良の膝の上にいる子竜へと向く。

「あ、名前をつけませんか？」

「名前？」

「そのドラゴンのです。飼うんですよね？」

「まあ、野に放つ訳にはいかないからな」

問いかけると、良はふふんとシニカルに笑いながら答えた。

「それにこいつは、我が魔王軍の第二の部下だ」

「それって私が第一なんですか？」

「違うわ。お前みたいなファンタジーパンピー略してファンピーは一生召使いだ」

第一はこいつ。と、良は妹の頭に手を置き、ひと撫でした。

あ、舞ちゃん今一瞬凄じ顔した。などと確認しつつ、アンは頷いた。

「そうですか……」

安心したような、役立たず扱いには少しガツカリしたような、微妙な気分である。

付随する思い出がまた顔を出しかけて、アンはまた首を左右に振った。

「……それはクセか何かなのか？」

「い、いえ、そうだ。そうじゃないですよ。名前ですよ名前。飼うにしても部下にするにしても名前がないと不便ですよ！」

もはや心配そうな顔になってきた良を誤魔化し、アンは若干大げさに主張する。

その勢いに押され、ぎよつと身を引いてから、良はそれを恥じるようにコホンと咳払いをして彼女に告げた。

「名前ならもう考えてある。クツキー、もしくはキクだ」

「えーっと、由来を聞いても良いですか？」

「こいつ、一見黒いが下に金色の皮膚があるだろう。黒と金だ。だからクロキンとも考えたのだが、それでは安易すぎるのでクツキー。もしくは逆さにして縮めてキクだ」

「異世界の人って、不思議な発想をするんですね」

「いや、お兄ちゃんだけだから。ていうか外見から離れられない時点ですらどう捻っても安易だと思うよお兄ちゃん」

「う、うるさいわ！ ああもうキクで決定」

女性陣に代わる代わる言われ、良はヤケクソ気味にそう断言した。「良いかキク。俺とお前で世界を征服してゆくのだぞ。代わりにお前は我が部下一号に昇格してやる」

言いながら、良は子竜——改めキクを持ち上げ語りかけた。

「あ、ちよつとお兄ちゃんズルい！」

まるで交換条件になっっていないとアンは思うのだが、抗議する舞

を見るにそれは重要な部分らしい。

それに対し、キクは短く「くあぁ」と答えた。

もしかしたらキクはもう人間の言葉が分かるのかもしれない。アンはそんな事をぼんやり考える。

「よしよし、良い子だ」

その返事に良は気を良くし、キクを片手で抱きなおしその頭を撫でる。すると、その遠まわしな由来である金色の皮膚が風に揺れる稲穂のように覗いた。

キクが目を細めおとがいを上げると、良は鼻から息を抜きながら頬を緩める。

良が初めて無邪気な笑顔を見せた気がし、アンも釣られて微笑んだ。

「な、何だ」

「いえ、良さんって可愛いなっと思って」

「……放り出すぞお前」

「ええ、褒めたのに!？」

アンが机に手を置き抗議の声を上げると、良は静かにキクを置き、机越しのアンの頭を両手で掴んだ。

「お・前・の・世・界・で・は、可愛いと言われて喜ぶ魔王がいるのか!？」

一語ずつ区切りながら、良が掌底でぐりぐりとアンのこめかみを撚る。

その顔にはもはや先程までの笑みは無い。

「アンお姉ちゃん良いなあ」

「良くないですって! 痛い痛い痛い!」

「クエエ」

指を咥えながら羨ましがる舞に叫びながら、アンはその痛みに悶え苦しんだ。

相手の気持ち良いツボが分かるという事は、痛みもより効率的に与えられるという事なのか。

まるで直接押しつぶされているような脳から、そんな言葉を絞り出される。

しかし、そうして騒いでいる内に、彼女の落ち込んだ気持ちはいつの間にか消えていたのだった。

## VS朝食

次の日の朝。

「ふあああ」

「くふええ」

同時に欠伸をしながら、良がキクを抱え階段を降りてくる。

まるでぬいぐるみが無いと眠れない子供みたいですね。

アンは彼にそう言おうかと思ったが、昨夜のこめかみの痛みを思い出し、自重した。

「おはようございます、良さん、キクちゃん」

しかし顔の緩みを抑えることは出来ず、妙な笑顔でアンは一人と一匹に挨拶する羽目になった。

「おはよ……と、お前は何をしているのだ」

寝ぼけ眼のまま普通に挨拶を返しかけた良だったが、魔王の沽券に関わるのか彼は途中でその言葉を飲み込むと、誤魔化すようにアンを睨みながら尋ねた。

「おはようお兄ちゃん。何って、料理だよ」

アンの隣に立つ舞もまた、振り返って彼に説明をする。

彼女らは良より一時間ほど前に起き、顔を洗い朝食の支度を始めていた。

パジャマの上にエプロンをつけ、共にキッチンに並んでいると、自分に妹が出来たようでアンには嬉しかった。

昨日の風呂場での出来事さえなければ、もっとすんなり彼女を妹のように思えたはずなのだが。

「料理って、お前らそんな事できるのか？」

「お兄ちゃん。私にできると思う？」

「おい」

問い返す舞に、良が半眼を向ける。

「あ、私は一応できますよ。酒場で賄いを作ってたこともあります

し」

アンは良を安心させるべくそう告げるが、彼は寝起きの所為だけでは無さそうな目つきの悪さで今度はアンを見る。

「お前が、料理なあ」

どうも自分は彼にあまり信用されていないらしい。

「食材も大体あちらと一緒にでしたし。トマトとか、レタスとか」

良を安心させるため、言いながらアンは、今きざんでいた食材を見せる。

異世界にあっても人間という種族は存在するように、野菜もまた同じものは存在するらしい。

冷蔵庫とやらを開ける際はどんなゲテモノが飛び出すか、アンも戦々恐々としたものだが、取り越し苦労だったようだ。

中身はほぼ彼女の知っている食材ばかりであった。

「あと、この毒フニフニ草とか」

言いながら、アンは底が赤くなっている、彼女の世界でもお馴染みの緑草を良に見せた。

「そりゃほうれん草だ！ そんな素材この世界にはねえよ！ ていうか毒って名前ついてるじゃねえか！ 何作ろうとしてるんだよ！」

だが、良はアンが掲げた葉を見て怒涛のツツコミをする。

「え、大丈夫ですよ。こうやって毒ジャムを塗れば毒は中和されますから」

「だからそれはフニ何とかじゃねえ！ 何塗ってんだ！？」

そんな、どう見ても毒フニフニ草なのに。

信じられない思いでアンは手元にあるジャム塗れの野菜を見た。

「お兄ちゃん近所迷惑」

「誰の所為だ！？ 生のほうれん草にジャム塗った時点でお前もおかしいと思え！」

叫ぶ良の腕から、うるさそうにキクが逃げる。

それを少し意外に感じながら、アンは見つめた。

「はあ、はあ、ああ、あいつも俺にべったりという訳では無いらし

いな。昨日も寝るときはクッションを勝手に裂いて、俺に背を向けて寝た」

「おー……」

息を整えながら、良がアンの疑問を察したらしく答えた。

流石は異世界最強生物。心まであのナデナデに侵されてはいなかったらしい。

自らの世界の最強がこの世界の魔王に屈しなかった事に、アンは妙な感動を覚えた。

「まあ、今朝はこいつの撫でろという催促で起こされたがな」

……ただ単に気まぐれなだけかもしれない。

本当に、普通の剣では虫刺され程度の傷すら与えられない存在なのになあ。

感動が無駄になった気がして、アンはため息をついた。

「それより、料理は本当に大丈夫なんだろうな？」

「あ、はい。毒フニフニ草さえ抜けば多分普通のサンドイッチですから」

「アンさん、だからフニフニじゃないって」

良の喉と近所の耳を心配してか。さすがに舞がアンに対してツツコミを入れる。

そうでしたと謝ってから、アンはとりあえず毒……ほつれん草は別の器に入れておく。

それを嫌そうに見てから、良はしかしと話題を変えた。

「あちらでもサンドイッチはあるのだな。もちろん別の名称が翻訳されているのだろうが。もしや由来はサンドイッチ伯爵か？」

「あ、はい。一つ目殺しのサンドイッチ伯爵が、相手を石の壁で押しつぶす魔法をヒントに、この料理はできました」

「エピソードはまるで違うのだな……」

「じゃあこの具って、つぶれた生き物がモデルなんだね……」

由来を聞いてげんなりしたような顔をする二人。

そつえばそんな理由で、これが嫌いな人もいたつくとアンは思

い出した。

「それが嫌ならこちらのシチューもありますから」

「あ、そうだ。こっちはインスタントのに野菜を入れただけだから、安全だよ」

アンが鍋に入った白いシチューを指し示すと、舞がそう補足する。あの四角い塊を鍋に入れてかき混ぜるだけでシチューになるというのだから、本当にこの世界の技術は大したものだ。

「安全と評される料理と言うのも、微妙に食いたくなくなるな」

「そんなに不安なら、お兄ちゃんも手伝ってくれば良いじゃない」  
「魔王が料理など、似合わないにも程があるだろう」

そう言つて肩をすくめる良。

良いと思うのになあ、お料理魔王。などとアンが思っている間に、彼は背中を向けてテーブルへと向かつてしまった。

しょうがない人、と二人は顔を見合わせ、料理の続きを作ることにした。

それから十分後。

良の横には舞。膝の上にはキク。向かい側にはアンという昨日と同じ配置で、食器を並び終えた彼らは座っていた。

「いただきまーす」

舞がそう言つてサンドイッチに手をつける。良も同じよう口の中でそう挨拶し、それを口に運ぶ。

この世界では、食前に主神レンギ様にお祈りする習慣は無いらしい。

まあ、神様も流石に異世界までは見ていないだろう。

そうアンは判断し、彼らに倣っていたきますと言つてサンドイッチに手をつけた。

「ど、どうでしょう」

「ん、まあ普通だな」

「そうですか……」

恐る恐るといった感じでサンドイッチを租借し終えた良に感想を聞くと、特に面白みの無いコメントが返ってきた。

「まあ、サンドイッチですからそう極端な事にはならないですよね」  
「なりかけただろうか」

良がジト目でジャム漬けのほうれん草を見る。

試しに齧ってみると、なんというか草とジャムの味がした。

こんなに似ているのに味がここまで違うとは、不思議なものだ。

アンが文字通り苦々しい経験を積んでいると、舞が口を開いた。

「そういえばお兄ちゃん。重大な問題が発生しました」

「ほう、言ってみろ」

拳手をする舞に、教師のように促す良。この世界でもこういうやり取りは一緒らしい。

「アンお姉ちゃんが着られる服がありません」

「……お前の物ではサイズが合わないか」

「上は何とかいけるんだけどね！。下がワカメっちゃうの」

「ぶっ」

舞の言葉に、良が口の中の物を噴出した。キクが迷惑そうにそれを見上げる。

「ワカメ？」

その言葉は上手く変換されていないようで、アンには意味が分からない。

現在のアンの服装は、昨日借りた寝巻きのままである。

……この世界のスカートはやたら短く、さらにアンが履いているのはドロワーズである。

今朝は早くに起きて色々試しては見たものの、全て下からはみ出してしまった。

ワカメってそういうことかとうやく当たりをつけ、アンは赤面した。

「だから、今日は皆で買い物に行こうよ」

それを楽しそうに見てから、舞はキクにかかった内容物をはらっている良に提案した。

「面倒くさい。お前らだけで何とかならないのか？」

「私お金無いもん。お母さん資金渡してくれるならそうするけど？」  
舞は両手を広げた後、ニヤリと笑った。お母さん資金……一体なんだろう。

アンが首を捻っている間にも、良と舞が言い争っている。

「お前にサイフなんて握らせたら、スツカラカンにしてサイフまで落としてくるから却下」

「お金入ったまま落とすよりマシでしょ？」

「最悪中の最悪じゃないただだろうが！ その浪費癖と落し癖を直せという話をだな……。もう良い、しょうがないから俺も付き合う」  
「最初からそう言ってくれば良いのに」

「はいはい、俺が悪かったよ」

ため息をつく良と、言いながら嬉しそうにしている舞。

こうして見ると普通に仲の良い兄妹に見える。

やはりあの風呂場での言葉は冗談だったのかしらとアンはぼんやりと考えた。

「じゃあ撫でて撫でて」

「意味が分かん」

言いながらも、良は抵抗が無駄だと悟っているのか、それとも自らも撫で中毒なのか妹の頭を撫でる。

「んっ……」

目をつぶり、舞はその感触を一時も逃がさないようにしているようだ。開いた口に紅潮する頬。髪をかき上げられる度に漏れる吐息。やはり、兄の愛撫に彼女が耽溺しているのは本当のようだ。

アレってそんなに気持ちいいのかな。思ってからアンは、プルプルと首を左右に振った。私ったら何を考えているのかしら。

「おう？」

ふと、良の指の動きが止まった。見れば、キクがテーブルの下か

ら顔を出し、彼の服を引っ張っている。

どうやら自分以外を撫でていることが気に入らないらしい。

「……むっ」

目を開けた舞が、それに気づきキクを睨む。

キクもまたアンを睨み返し、彼女らは傍目にも視線の火花が幻視できるほど激しく睨みあった。

異世界最強生物に喧嘩を売るなんて無謀な！　とも思っのだが、舞の底知れなさを考えると何故か良い勝負をしそうな気もしてきてしまう。

いやいや、そんなことより止めなければ。アンが声を上げようとした時。

「あー、バカ、喧嘩すんなお前ら」

良が、舞とキクの頭を同時に撫でた。

へにやりと、双方の力が抜ける。相変わらず魔法のような指だ。

「何だ、お前も撫でて欲しいのか？」

「りよ、良さんは、自分の手を傾国兵器だと自覚してください！」

アンの視線に気づいた良が、こちらを見てそんな事を言う。

冗談ではない。自分も撫でられてしまったらどうなることか。

それから緩みきった一人と一匹の顔を見て、この人と暮らしている本当に大丈夫だろうかとアンの心には再び不安が渦巻くのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6193z/>

---

魔王の家の村娘 A

2011年12月21日01時48分発行